

健康文化

命の重み

ーガンとたたかいながら平和な未来を見つめていた友ー

北川 勝弘

はじめに

去る7月7日、旧友M女史が亡くなった。乳ガンを発病して以来、12年間に及ぶ病気とのたたかいの日々を、彼女は決して病気に頭を垂れることなく、積極的で前向きな、毅然とした生き方を貫き通した。そればかりか、彼女は、男女を問わず周囲のガン患者たちを明るく励まし続け、最後まで、自分の状態を客観的に見つめ続ける、科学者らしい姿勢を崩さなかった。明るく優しい、しかも、たくましい女性だった。

彼女は、1970年代の半ばに名古屋大学の大学院理学研究科で博士号を取得した後、長らく研究員として勤めてきたある研究所を、昨2008年3月に定年退職したばかりだった。昨年末に彼女は、「乳ガンとの闘病体験」を女子学生たちに語り、若い世代の学生たちに、平和な未来の社会を築いて欲しいとのメッセージを伝えた。本稿では、その講演の一端を書き留めることにしたい。

1. 講演に向けて

M女史（以下、Mさんと呼ぶ）の夫君から、Mさんの病状が思わしくない、との連絡メールを受けたのは、昨年9月下旬のことだった。乳ガンが肺に転移し、増悪（著しい増え方）している状態に対する治療法が、どうも彼女の病状にはうまく合わないようだ、とのこと。11月半ばに、抗ガン剤の種類を変更した結果、彼女の身体の痛みや不調がやや和らいだ、との知らせが届いた。私は、Mさんが小康状態になったこの好機に、何か集中して取組める課題を持つことで、ガンに向き合う彼女の気力を一層高められないものか、と思った。

私は当時、名古屋市内のある私立女子大学で、「生命科学」の講義を非常勤講師として担当していた。あれこれ思案した末、私は、その講義の一コマを使って、Mさんに「乳ガンとの闘病体験」を学生たちに話してもらってはどうか、と思いついた。夫君に彼女の意向を打診してもらったところ、彼女はすぐに快諾してくれた。それで、12月中旬に、「命の重みーガンとたたかうー」をテーマとする、Mさんによる「特別講義」が実現する運びとなった。

2. 若い日の出会いとその後の交流

私たち夫婦がMさん夫妻と初めて出会ったのは、1980年代のはじめ頃、お互いに共働き世帯の親同士として、名古屋市内の地域の学童保育所を支える活動を通じてだった。子供たちの健やかな成長を願い、学童保育所の運営を支える父母会活動の中で、困難な保育所運営の活動を献身的に担いあう数家族の親同士が、いつしか人間的な信頼感を互いに持ち合うようになり、日常的に親子ぐるみで交流するようになった。親子連れで、春にはある親の在所を訪ねて山菜採りを楽しんだり、夏には北アルプスの雲の平へキャンプに出かけたりした。子供たちが学童保育所を卒所した後も、親同士で春に連泊で遠出ドライブに出かけたり、年末の忘年会で旧交を温めあってきた。

それらの交流は、私たち各人の人生に多面的な彩りを与えてくれ、このストレスの多い世の中で、各人が生きるうえでの大きな励ましを与えてくれた。Mさんは、そのような仲間の輪の中にあって、いつも明るい笑顔を絶やさず、知的な刺激に溢れた辛口世評でおしゃべりの話を咲かせ、科学者らしい理性的な話題を適度に持ち込んでくれて、仲間の一同にとっては不可欠の存在だった。

3. 乳ガンとの闘病体験

Mさんの講演、「命の重みーガンとたたかうー」は、約45分間にわたって行われた。まず、「乳ガンとはどのようなものか」について、乳がんの発病部位と種別、わが国での年間発病者数（約3万人）や死亡者数（約1万人）などが、スライドの図に基づいて説明された。そして、1997年に49歳で発病して以来、昨年3月に職場を定年退職した後、今日に至るまでの10数年間に及ぶ、具体的な「乳ガンとの闘病体験」が語られた。

Mさんは、毎年の乳ガン検診を受けていたが、そこでは何も発見されなかった。ところが、1997年4月上旬のある日、右乳房の右脇にあったビー玉状しこりを自分で触診して発見！最初にガン告知を受けた時、Mさんは乳房の温存手術を受け、2ヶ月間休職した後、復職した。それから4年間は、定期的に診察を受けながらも、順調な日々が続いた。それだけに、2001年に53歳でガンが再発したことを医師から告げられた時、初回時とは比較にならないほど大きなショックを受けたという。それ以後の各種リンパ節や肺への転移、甲状腺への発ガンと対処法の変転の経緯を、Mさんは淡々とした口調で話された。

Mさんは、定年退職後、ガンが肝臓に転移し、胸隔膜にも転移しているらしく、胸水がかなり溜まっていて、血中酸素濃度が規定値よりもかなり低い状態となっており、週1回の点滴による抗ガン剤治療を受けている、という。

4. 「今の自分にできること」

Mさんは、「ガン治療の体験談」に続けて、今、自分が何を考えているか、について話された。

現在はもう、これまでのように自分が動き回って何かをできる状態ではないので、今の自分には、生きている証として一体何ができるのだろうかと考え、彼女は「九条の会」と「ペシャワール会」に入会したという。ペシャワール会については、国境なき医師団の中村 哲さんが始めた、途上国に井戸を掘って飲み水や灌漑の問題解決を図ろう、という会の趣旨に賛同したからだという。

『九条の会』とは、日本国憲法第九条を守り抜いて、日本が『戦争できる国』にならないようにしよう、と運動している組織です。ガンを患うというのは悲惨なことです、ガンは人智を傾ければ、いつかは治療法も見つかり、解決可能になると思います。でも、戦争が起こって、ミサイルが飛んできて死んじゃうのは、ガンで死ぬよりもっと悲惨です。日本を戦争などしない国にすれば、日本は世界中に戦争をしないように呼びかける資格が持て、人類を倫理的にもっと高い次元に引き上げるうえで、画期的な貢献ができるでしょう。今の私には、会費を払うことしかできませんが、それでも、こうして未来の平和な社会を創る仕事に自分がつながっている、と考えると、自分がガンだということの怖さにうちのめされるよりも、未来の方向に向かってワクワクします！」

5. 若い世代へのメッセージ

Mさんの講演の最後は、「若い皆さんへのメッセージ」で結ばれていた。元気な若いエネルギーを、あくまでも自分自身の確立に努め、自分を高める方向で前向きに発揮して欲しい。若いということ、健康であることは、未来の可能性を秘めているわけで、素晴らしいこと。だから、皆さんは、人を羨んだり、自分がつまらない人間だと卑下したりしないで欲しい。

自分が存在するから世界も存在する、と考える考え方が「観念論」。それに対し、自分がいなくなっても宇宙や世界は存在する、と考える考え方が「唯物論」。私は学生時代以来、いろいろ勉強して、唯物論の考え方にたどりつきました。私自身は、木の葉っぱが落ちて地面に還るように、この世の中からいなくなりますが、若い皆さん方が青い葉っぱを繁らせ、花を咲かせ、やがて、次の社会を創りだしていつてくれることを確信しています。唯物論の考え方に立てば、あなた方を通じて、自分が未来とつながっていることを確信でき、自分が死ぬことは、残念ではあるけれど、ただただ怖い、ということではありません。

「若い皆さん、次の時代の地球や人間社会を、よろしくお願いします。」

6. 講演をめぐるあれこれ

Mさんの講演を実施するに際して、Mさんの夫君は並大抵の忙しさではなく容易には休暇を取れないため、彼女が西三河地方の自宅から名古屋市内の女子大に至る交通手段をどうするかが、私には大きな懸案事項だった。しかし、彼女からは、「自分で何とかするから、大丈夫よ。」との返事が届いた。講演の当日、驚いたことに、彼女は自分で自動車を運転して会場にやってきたのだ。

Mさんの夫君からは、彼女の講演の模様をビデオで撮影しておいて欲しい、と事前に頼まれていた。そこで、名古屋市在住在勤の私の長女が、当時、7月に出産した後の長期休暇中だったので、ビデオ撮影役を引き受けてもらった。娘はにわか撮影技師を務めるために、前の晩、婿殿から特訓を受けたようだ。私と同様、器械操作にはめっぽう弱いわがカミさんは、娘がビデオ撮影を行っている間、そのすぐ横の席で、もっぱら赤ちゃんのお守り役を務めていた。Mさんの講演には、大学教務課から特別の許可を受けて、私の妻や長女の他、Mさんの知人のご夫妻や妻の友人たちも聴講した。

Mさんの葬儀に際して、この時に撮影されたMさんの講演の様子が、10分間ほどに短縮されたビデオ映像で参会者に紹介された。画面の中のMさんは、実に明るく生き生きと、「未来につながる生き方」の真髓について、学生たちに語りかけていた。彼女は、ガンとたたかう日々の中で、平和な未来を見つめていたのだ。その自分の平和への願いや思いを、彼女は必死に学生たちに伝えようとしていた。どんな時にも前向きに、積極的な生き方を追求すること、どんなにささやかなことであっても、平和な未来をもたらす取り組みにつながるような生き方を追求すること。「命の重み」をかけて、若い世代に呼びかけたMさんのメッセージは、きっと受講生たちの多くに深い感銘を与えたに違いない。平和な未来を希求する彼女の熱い思いに、私は心を打たれた。

おわりに

Mさんを失ったことは、実に惜しまれる。彼女の逝去はあまりにも速い旅立ちだという思いが、私の喪失感を強める。しかし、私たちは今、彼女が模範を示してくれた、常に前向きな生きる姿勢から真摯に学ばなければならないだろう。私は、彼女のメッセージにこめられていた、平和な未来の社会を築く取り組みの一端を、ささやかながらでも引き受けていきたい、と考えている。

(元名古屋大学農学国際教育協力研究センター・教授)